

# 社会課題の解決ではなく、 いかに変化を生み出せるか？

講座名：「芸術文化の価値とは？アートとケアの可能性を考える」  
講師：中村美亜（九州大学大学院 芸術工学研究院 教授）  
ゲスト：アサダワタル（文化活動家）  
進行：篠田菜（株式会社 precog）

障害のある人・子ども・シニア・日本語を母語としない人たち——多様な人々が芸術活動に参加する取り組みが注目を集めています。そもそも、なぜ、このような取り組みが行われているのでしょうか？芸術と福祉の両分野を横断する取り組み事例とともに、芸術と福祉の親和性や両分野がまじわることで生まれる可能性について考える座談会が行われました。

## 演劇のフィクションが引き出した、 認知症の方たちの記憶と想像力

まずは美亜さんから「文化芸術の価値とは？」というテーマで講義がありました。美亜さんが翻訳した『芸術文化の価値とは何か — 個人や社会にもたらす変化とその評価』に触れながら、「他者への共感」「変化が起きる状況を生み出すこと」「信頼やネットワーク」「アイデンティティやプライド」「ウェルビーイング」など文化芸術がもたらす価値や評価について解説した後、近年取り組まれている 認知症ケアの場でのワークショップ事例をお話いただきました。

重度の認知症で言葉でのコミュニケーションが難しい方達に対して、俳優が介入し、フィクションを交えながら共に演劇を行なっていくプロジェクト。「言語コミュニケーションが苦手な人には非言語コミュニケーションが非常に重要になってくる。俳優の説得力のある演技は観る者の想像力や記憶力を強く喚起します。」最初は戸惑っていた高齢者施設のスタッフも、認知症の方々の普段見られない能力や反応を発見し、これまでに耳にしたことない過去のエピソードを聞くことが喜びにつながり、場の空気が好転したことで、「ケアする側/される側」という関係性に変化がもたらされたと言います。

「特に課題解決を目指した事業を企画する場合に、なかなか成果が見えないことがあります。ですがそもそも、社会課題を解決するのは不可能と割り切った方がいいと私は思っています。むしろ変化を生む状況を作り出したのか、ということ、価値として見ていくべきです。」

## 個人がみえてくると、眼差しや関係性が変わる。 表現活動と支援活動の接点

アサダさんからのひとつめの事例は、アーティストとして長年関わってこられた福島県のいわき市の復興公営住宅で展開されてきた「ラジオ下神白(しもかじろ)」。ラジオ番組(ラジオCDの制作)であり、バンドであり、歌声喫茶。福島第1原発事故後に避難してきた人たちが入居した団地で、様々な背景、思い、状況の中にいる方が参加できるメディアや場を作っていました。



アサダワタルさん講義スライドより

「今日の話の中で一つ重要なのは、個人が見えるということがあるかなと思っていました。被災者というひとづくりの形じゃない関わり方をどういうようなアプローチでしていくかが一つ文化芸術にできることかなということ。僕も含めて僕らこのプロジェクトは、ケアや支援って言葉を全面的に出して活動しているわけではないんですけど、結果的にちょっと変わった支援活動になるちょっと変わった支援活動がニアリーコール表現活動になるみたいなことは目指してきたかなと思っています。」

品川区立障害児者総合支援施設「ぐるっぼ」の事例では、アートディレクターとして様々なアーティスト、作り手を巻き込みながら進めたプログラムについて紹介。コラボレーターとなるアーティストは、些細なことであつたとしても、利用者の”主体的な何か””生み出してること”を全て拾って、繋げていく。それをダンスに繋げることもあれば、何にも繋がらないこともある。アーティストが入ることで、それまで見えてこなかった別の当事者性に光が当たる瞬間があることが重要だと言います。

## 受容する力。芸術文化、 アーティストはケアの現場で何ができる？

後半の対談では、参加者からの質問も受けながら引き続き対話が行われました。

「ズレているんだけどなぜかグループがある状態はすごく僕の好みですね。みんながそれぞれバラバラに否定されずにいる状況を作りながら、でも一つの表現、一つの場になっている状況をどう作るかということは大事だと思ってます。」というアサダさんの言葉に美亜さんも共感を示します。

「表現の活動だけに、表現の瞬間に焦点が集中しがちだけれども、実は目標を見出すことや、作品や成果をより広く社会化する、発表が終わった後にどうしていくのか、どう伝えていくのかということにもクリエイティビティを発揮する必要がある。そこはアートの人たちの出番だと思う。それから、ケアする人たちを先入観で一面的に捉えないこと。すごいクリエイティブな人だったりアーティストックな人がいたり、面白いこといっぱいやってる人たちいるので、何かそういう人たちと組んだりしていくともっと面白いことが起きていくと思う。」と美亜さん。

芸術文化、アーティストがもつ、想像力によって場を変容させる力。ケアの現場でアート活動をする人たちにとって、たくさんのヒントが詰まった回でした。



アサダワタルさん講義スライドより

## 本講座の目標

1. 芸術文化にはどんな価値があるかを理解する
2. アートがどのようにケアと結びつくかを説明できるようになる
3. アートによるケアの実践を構想できるようになる

### Theory

- ・コミュニケーションの「あいだ」に挟むものとしての「表現」の**可能性**に着目すること。
- ・課題解決思考、目的思考にとらわれすぎない、「**余白**」を大切に**した場づくり**であること。
- ・そこに携わる誰もが「〇〇者（被災者、障害者、高齢者、子どもなど）」でなく「〇〇さん」と呼ばれる、**個性を埋さない関係で出会う場づくり**であること。
- ・まず自分たちが「**楽しい**」という**価値**を**全力で肯定する場づくり**であること。

## 文化芸術にできること（文化的価値）

- ① 振り返りの機会を与える … 自分の見方や人生、他者への共感
  - ② 変化が起きる状況を生み出す … オルタナティブな思考・創造・行動
  - ③ 社会関係資本 … 信頼、互酬性の規範、ネットワーク
  - ④ アイデンティティやプライド … 個人、集団
  - ⑤ ウェルビーイング … 身体的、精神的
- など



中村美亜さん講義スライドより



### 講師 中村美亜

九州大学大学院 芸術工学研究院 教授。専門は文化政策・アートマネジメント研究。近年は芸術文化の価値と評価、社会包摂、認知症の人との共創的アートに関する実践的研究を行っている。訳書に『芸術文化の価値とは何か』（水曜社、2022年）、編者に『文化事業の評価ハンドブック』（水曜社、2021年）、単著に『音楽をひらく』（水声社、2013年）など。



### ゲスト アサダワタル

分泌活動家。アーティスト、文筆家、近畿大学文芸学部専任講師、本と音楽の店<とく>オーナー。地域、ケア現場、復興団地等に文化的な方法で関わり、そこに居る人たちと場づくりを行う。これらの経験から得た視点や閃きを本や音楽を通じて発表。博士（学術）。著書『住み開き』（筑摩書房）『想起の音楽』（水曜社）、CD『福島ソングスケイプ』でグッドデザイン賞受賞他。

撮影：平林克己 提供：まえとあと

# 幸せの追求と社会の変革。 福祉と芸術の役割を問い直す

講座名：「芸術で何ができる?福祉施設の実践」  
登壇：久保田翠（認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ）、樋口龍二（NPO法人まる）、山口光（認定NPOポバイ）  
進行：長津結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

福祉施設でも文化芸術を取り入れた様々な取り組みが実践されている昨今。舞台芸術活動、地域の劇場・文化施設や地域とのネットワークのつくり方などを知り、芸術文化で何ができるのか、舞台芸術の可能性について考えることを目的に、先鋭的な活動を実施されている福祉事業所の方をお招きし、座談会が行われました。

## 川柳「課題とは？ おもしろいからやってるの 一緒にやる人 大歓迎！」

まずはじめに山口さんの認定特定非営利活動法人ポバイでの活動共有。冒頭、まず気に留めておきたいこととして、福祉とは「幸福」を指す言葉であること、そして、「課題とは？ おもしろいからやってるの 一緒にやる人 大歓迎!」という川柳の披露からはじまりました。ライブパフォーマンスで客席から舞台上がって自然に一緒に踊り出す福祉事業所の利用者の話では、「自分がやりたいんだからやるんだ」というようなこの彼らの衝動性に私はすごく魅力を感じています。」という山口さん。ポバイの利用者と山口さんで構成する司会ユニット「まなミネびかりん」は、“ぶっ飛びながらも気配りトークのまなみん、心優しき揉めごと嫌いのミネミネ、そして一応きちんとやろうとする びかりん。この3人の司会ユニットで たまにあらわになる崩壊も見どころです。”というキャッチコピーで各方面から司会の依頼が絶えないそう。



山口光さん講義スライドより

## アート活動の目的は、価値の変革。

NPO法人まるの樋口さんからは、まるの様々な活動とともに、厚労省の障害者芸術文化活動普及支援事業の福岡県のセンターと九州の広域センターとしての事業についても紹介いただきました。



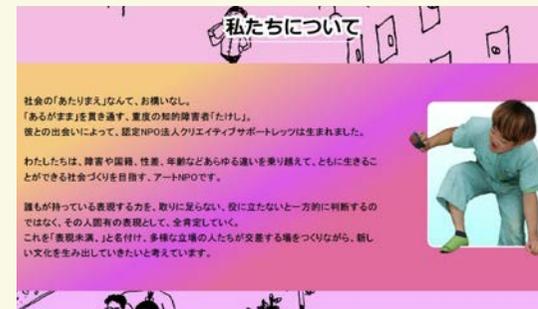
樋口龍二さん講義スライドより

「今でこそ障害者芸術という言葉が当たり前聞こえる時代になってきた。そんな中、作品のアウトプットの方法に工夫が必要と考えているんですね。しかし、やはり、(福祉における)アート活動は良い作品を作ることが目的ではなく、作品を披露することで既存の価値の変革するとか新しい価値の創造することだと思っんです。障害のある人たちの役割の創造に繋がっていききたい、社会を変えていききたいという思いで、支援センターでの取り組みを行っています。」

支援センターとしての取り組みの中でも、特に文化施設からの要望が多いのは、障害のある人たちとともに文化施設を巡るワークショップだそう。視覚障害、聴覚障害、車椅子ユーザー、知的障害、発達障害など、様々な障害のある人と共に、グループで館内を周り、困りごとやバリアを知りながら、どんな対応が必要か考え、共有し合う実践型の研修です。「いま文化施設も、合理的配慮が義務化されて、対応を考えているところが多いけれど、座学というよりは、障害のある人たちの特性を知って、当たり前の関係を構築しながら体験して学んでいけることがあると思うんです。」と、実際に障害のある人に出会い、ともに同じ場で考えることの大切さについて話されました。

## 福祉の仕事も、文化の仕事も、幸せを追求し、 ともに幸せになっていくこと

「皆さんの地域もそうかもしれませんが、ほとんどの人は重度の知的障害の人がどんな人なのか知らない。それでいて共生社会なんてうそぶいたところで、何も変わりはない。であるならば我々はどこか外に出かけて、障害のある人たちと一緒に 我々はここに存在しているんだ ということを見せていく。その活動を仕事だって 言い張ってやっている団体です。」と認定NPO法人クリエイティブサポートレッツの久保田さん。様々なトーク、イベント、「のびあてれび」というテレビ局まで運営する「たけし文化センター」の「表現未満」、「クラブ・アルス」など様々な事例が紹介されました。「問題行動だと言われる行動をここでは、100%容認して、環境を整える。水をかぶるのが好きな人は、毎日 水をかぶってもいいという。やっぱり本人がやりたいことをやっている時の姿 それは本当に幸せそうだし、福祉というのはそういう嬉しそうにしているとか その人が本当に楽しそうに生きる喜びを感じている みたいな瞬間を目撃していく一緒にいて一緒にそれを称え合うのが仕事。」「人が幸せに生きることを追求しているという意味では、福祉も文化も本来そうであるはず。その人が喜びを感じながら生きていく ということを我々 福祉職員もそしてスタッフも、共感して、自分の幸せも高めていく そういうのが福祉としての仕事なんじゃないかと思っています。」と話します。



久保田翠さん講義スライドより

## 信頼と敬意。 当たり前の関係づくりから始める協働

福祉と芸術の関係性についてのみではなく、文化やそれを支える制度、行政との連携についてなど、議論が多岐に及んだ後半。文化政策を専門とする九州大学大学院芸術工学研究院准教授の長津さんも「行政や公共文化施設など公的な立場の文化の担い手には、他の分野や領域の人たちとの繋ぎ手になる意識も大切なのではないか」と話します。

トークの最後、久保田さんは「私が感じている、福祉の場に芸術が関わる時に必要なことのひとつに、信頼というのがあります。今日、トークを聞いてくださった方たちで、信頼が大切ということコメントしている方が結構いらして、安心しました。」とコメント。芸術関係者なのか、福祉事業者なのか、行政の担当者なのか。立場はともかく、互いの立場や得意を生かし合いながら、敬意を払い、興味を持ち合える関係がつかれるかどうか。参加者からの質問や感想も多く投稿された回でした。



### 登壇 久保田 翠

認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ 理事長。東京芸術大学大学院美術研究科修了。長男の出産をきっかけに2000年クリエイティブサポートレッツ設立。2010年障害福祉事業所アルス・ノヴァ開所。2018年たけし文化センター連尺町建設。2022年ちまた公民館開設。2017年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。2022年度静岡県文化奨励賞受賞。



### 登壇 樋口龍二

NPO法人まる 代表理事。1974年生まれ。1998年、染色会社就職中に「工房まる」と出会い、表現力に魅了され即転職。2007年に法人設立と同時に代表理事就任。表現作品などを社会にアウトプットする企画運営や、サポートする人材育成としてセミナーやワークショップ等を九州/福岡を中心に各地で開催している。2014年に「福岡県文化賞(社会部門)」を受賞。



### 登壇 山口 光

認定特定非営利活動法人ポバイ事務局・パフォーマンスアーツ担当、歌手、パフォーマー。障がいのある人とのパフォーマンスやそのサポート、他団体や地域と連携したアートプロジェクトのオーガナイズを行なっている。ポバイの外では、ちいさなひとたち音楽を届ける音楽ユニットクジララのうた担当をはじめバンドのボーカルを務め、ミュージシャン、ダンサーなど様々なアーティストとの共演多数。

# 劇場は普段出会わない人が、芸術文化を介して、新しい関係を築く広場

講座名：「劇場に来てもらうには？地域とつながる実践」

登壇：恵志美奈子（世田谷パブリックシアター劇場部学芸チーフ）、吉川剛史（穂の国とよはし芸術劇場PLAT 事業制作部）、田澤瑞希（株式会社 precog / まるっとみんなで映画祭事務局）

進行：兵藤菜衣（株式会社 precog）

公共劇場・民間劇場・芸術団体で実施されている、地域との関係の結び方や、劇場公演やイベントへの障害当事者の呼び込み方について、障害のある方と取り組み事業の具体的な実践について伺いながら、劇場と舞台芸術のひろき方について考える座談会が行われました。

## 普段出会わない人に、映画祭を通じて出会う



田澤瑞希さん講義スライドより

最初に話題提供したのは、株式会社 precog の田澤さん。precog が事務局運営をするまるっとみんな映画祭についての紹介がありました。この映画祭は子供からシニアまで 障害のある人もない人も 日本語が母語でない人も みんなで集う場を作るユニバーサルな映画祭として2021年にスタート。「出会う」「混ざる」「知る」をキーワードに、障害のある人もない人もともに映画やワークショップを楽しむことができるようなソフト、ハード面での環境づくり、地域の団体や市民チームとの連携によって丁寧につくりあげてきたプロセスが語られました。

## 公共の文化施設や劇場ホールは、地域に暮らす人人の文化権を守る砦

続いて、穂の国とよはし芸術劇場PLATの吉川さんから、劇場で実施されている「ワークショップファシリテーター養成講座」についての紹介がありました。2014年からスタートした「ワークショップファシリテーター養成講座」は、小中学校や特別支援学校・学級に出向いて行うワークショップの進行役、ファシリテーターを育成している事業。子ども向けのワークショップ「ワークショップ縁日」を企画

実践する講座と、まちを歩き、気になる人や場所を聞き書きという手法を用いて取材し、台本をつくって演劇を発表する講座の2種類を開講されています。

「公共の文化施設や劇場ホールは 趣味や余暇のためだけにあるのではなくて、地域に暮らす人々の文化権を守る砦のようなもの。誰も取り残さない地域作りのための クリエイティブな実践実験の場。」であると吉川さんはいます。「ちがう」「知らない」他の誰かへの 想像力を持って一緒に創造する、作る場であるために、一緒に地域を盛り立ててくれる人材を育成するというのが、ファシリテーター講座の役割。コロナ禍に事業が進行できないとき、改めてスタッフで考えたという劇場の役割。短絡的に収益性を求めるのではなく、地域の創造性を育てる長期的な投資を行い、地域の中での新たな繋がりを育むという目標を掲げています。

## 想像して創造する劇場

いろいろ「ちがう」「知らない」他の誰かへの想像力を持って、一緒に創造する、つくる場

演劇やダンスを見る場、つくる場だけじゃない、私たちが一緒に暮らす場を「創って」いる

吉川剛史さん講義スライドより

## いろんな属性の人が集まる広場づくりを意図的に工夫していく

恵志さんは、「劇場は広場」という劇場のミッションのもと、27周年を迎える文化施設世田谷パブリックシアターで一般向けのワークショップや地域連携事業、専門家への育成事業などを行う「学芸」に所属されています。公演事業と違い、学芸事業では、稽古場や学校など、劇場以外の地域の施設等を使いながら、表現のトレーニングを受けていない一般の人々との作品創造を行なっているそうです。「全ての人には語るべきことがある。その語るべきこと、アイデアから集団で演劇をつくる」ことを目標に、「みんながアイデアを出しやすい状況をいかにつくるか」を試みているそうです。

「人は自分に似ている人と群れやすく、誰か他の人の意見

を聞いてるつもりでも、自分と似た考えの 誰かに確認を取っているだけ ということも多いものだと思います。そういった意味では人は常日頃、自分とは違う人に向けて小さな差別や排除や無意識に選択しているともいえます。昔ながらのコミュニティがもはやないこの社会で、特にあらゆる人が住む東京では自分に近い人だけを探し出すことも可能です。いろいろな人が集まる広場は自然発生的には起こり得ません。だからこそ、劇場がやるべきことは、意図的にいろんな属性の人が集まる広場づくりを行うことではないかなと思っています」という恵志さん。都営の都営下馬アパートで展開されている、「極楽フェス」について紹介されました。



恵志美奈子さん講義スライドより

## 繋がっていける人と繋がると、自然と道がひらけてくる

後半の対談では、「興味関心もさまざまな地域の人同士と一緒にできるプロジェクトでどうやって信頼関係を築き、コミュニケーションしているか」「そもそもアートに興味のない人たちにどうやってその魅力を伝えればいいのか」「予算やリソースがない中でどうやってプロジェクトを進めている？」といった地域プロジェクトにおける課題について、それぞれ対話をしていきました。

例えば、丁寧に地域の人に聞き書きやインタビューを行い、互いを知り合っていくこと、劇場やイベント自体に足を運んでもらい知ってもらうことで信頼関係を築きやすくなる。「意図して頑張るというよりは、頑張る気があるのは伝えるんだけれども、なんとなく 繋がっていける人と繋がっていくと広がっていく、というような感じでことが起こっているのかな」と思っています」と恵志さんは言います。

予算やリソースに限りがある中でも、「自分が何をやりたいと思っているか」が出发点になれば、ハード面だけではなく、ソフト面の打開策が自然と見えてくる。完璧を求めすぎずに、積み重ねていくことが、地域のプロジェクトにおいて何よりも重要なことであるということ、など3名のお話には共通項がたくさんありました。



## 登壇 恵志美奈子

世田谷パブリックシアター劇場部学芸チーフ。東南アジアとの国際共同制作プログラムや人材育成プログラム等を担当後、世田谷パブリックシアターの市民参画演劇プロジェクト「地域の物語」を担当。2021年度からは世田谷区下馬地区の福祉法人や町内会等と連携し、地元コミュニティの多様性や他者を知ることを目的にしたアートフェスティバル「極楽フェス」を都営下馬アパートで開始。



## 登壇 吉川剛史

穂の国とよはし芸術劇場PLAT 事業制作部。社会人を経て、座・高円寺「劇場創造アカデミー」に入学。社会と演劇、地域と劇場の関係性を考え制作や劇場運営について学び、2013年より、愛知県豊橋市の公共劇場「穂の国とよはし芸術劇場PLAT」で勤務。「大道芸 in とよはし」「ワークショップファシリテーター養成講座」「プラットが学校へ。」「市民と創造する演劇」「舞台手話通訳付き公演「楽屋」」「視覚・聴覚に障がいのある方対象のPLAT劇場ツアー」などを担当。



## 登壇 田澤瑞希

株式会社 precog / まるっとみんな映画祭事務局。日本女子体育大学舞踊学専攻を卒業後、助手として勤務(2018～2021年)。2021年4月にprecogに入社し、まるっとみんな映画祭、TRANS-LATION for ALL2023、EPAD x THATRE for ALLなど多様な観客を想定したインクルーシブな場づくりをする事業を担当。